

くがつこのかさんとう  
九月九日山東の兄弟を憶う (王維)

ひとり 異郷に 在つて 異客と 為り

かせつ 佳節に 逢う毎に 倍 親を 思う

はる 遙かに 知る 兄弟 高きに 登る 処

あまね 遍く 茱萸を 挿して 一人を 少くを

獨在異郷爲異客 每逢佳節倍思親  
遙知兄弟登高處 遍插茱萸少一人

解説 九月九日の重陽の節句の当日、異郷にあつた王維が、親兄弟を思いやつて望郷の念を詠つたものである。

語釈 ※九月九日||重陽の節句。この日は付近の小高い丘に登り、菊花を浮かべた酒のみ、かわはじかみの小枝を髪にさし、災厄を払う習慣があつた。※異郷||ここでは長安をさす。

※佳節||めでたい節句。※倍||いよいよ。※親||肉親。

※茱萸||和名は「かわはじかみ」。赤い実がなる。邪気を払うと信じられていた。※少一人||一人いない。「二人」は王維をさす。

通釈 自分はたった一人で故郷を離れ、見知らぬ他郷で旅人となつてゐる。めでたい節句に出会つと、ますます故郷にいる親兄弟のことがしのばれる。私は想像する、兄弟たちが高いところに登つて、皆「かわはじかみ」を髪に挿している中に、ただ一人が欠けているのを。